

朝早くに仙台を立ち、東京に着いて最初に向かったのは笹川平和財団国際会議場でした。笹川平和財団理事長である田中様の講演をお聞きした後、ディレクトフォースに所属する方や、日本財団、笹川平和財団でお勤めになった方々とのディスカッション、という流れでした。

田中様の講演の中でも特に、

「ヨーロッパの国は周辺の国々と電力線網でつながっているため、原子力発電をやめることができる」

「福島事故は人災である。安全性は人の手で確保できる」

これらの言葉が私の考え方を大きく変えてくれたように思います。私はこれまで、日本が原子力発電をやめられないのは、電力の値段が大きく変動しないようにするために、低コストで発電できる原子力発電を使う必要があるからであり、また、「地震大国日本」と呼ばれるように日本は自然災害が多いため、事故が起きるのは仕方がないことであり、むしろ事故が起きたあとどうしたらいいか考えるべきだ、という意見を持っていました。しかし、原子力発電をやめられないのは、日本が島国であり、さらには領土問題を抱えているゆえに、中国やロシアをはじめとした周辺の国々とうまく連携を取れないことが原因であり、もしもの時に共有してもらえないため原子力発電をやめたあとの電力の安定供給を保障できないからだと教えていただきました。また、安全性については、研究などを通してこれから起きるかもしれない自然災害を予測した十二分な準備をしておけば、最低限の被害で済むそうです。東日本大震災を例に挙げると、太平洋側には5つの原子力発電がありますが、事故が起きたのは福島のみです。むしろ、福島よりも震源から近い女川原発では事故は起きませんでした。それはなぜかというと、女川原発を建てる際に、津波が来る可能性を想定して、本来建てるはずだった場所よりも10メートル高い場所に建てたからです。このような自然災害と戦う術を人間は持っているはずなのに、その技術の使い方を間違えてしまった結果の事故だったのです。だからこそ、この失敗を他の国と共有していくべきだ、と田中様はおっしゃっていました。

また、講演の最後に「安全性は人の手で確保できるということですが、その技術が実用化されるまでには時間がかかるはずですが。そのためヨーロッパの国々とは違い周辺の国々と簡単につながりを作ることはできないため、原子力発電をやめるわけにはいかない日本は技術が実用化されるまでの期間をどうやって乗り越えればいいのかとお考えですか」という質問をさせていただきました。これの答えとして、田中様は、まずは日本の世界一厳しい基準をクリアした今の原子力発電所を徐々に稼働する。そして、40～60年後に今の原子力発電所が古くなり、建て替えを行う、という際には、ゴミを削減するため小型の原子力発電所に変えていく、というように答えてくださいました。

このようなお話をお聞きして、今、日本が抱えている問題は、すべてつながっているのだと実感しました。日本は資源が少ないため、(日本と相手国の主張どちらが正しいかは考えないとして、)領土をすんなり譲るわけにはいかない。もちろん相手国も譲るはずがなく、領土問題が発生する。それが原因で政府同士の関係は決して良好とは言えなくなる。それゆえ、ヨーロッパのように、集団的な安全保障のためにつながりを持った方がお互いにとって利点が多いとわかっているにもかかわらず、そう簡単に関係性を改善できない。そのため、電力の安定供給を求めるのなら、国内でも賛否両論分かれる原子力発電を稼働せざるを得ない。このようにすべての問題は関連しているため、どれかを解決するためにはすべての問題に同時進行で取り組まなければいけないのだと感じました。そして、このような問題に取り組むとき、研究者の存在はもちろん大切ですが、やはりそれを統括する人間が重要であると知りました。人望があることはもちろん、視野が広く思いやりのある人間であることが求められ、大切な決断をする勇気も必要です。私はまだ高校生、しかしもう高校生です。社会に出るまでの時間は長いようで短いのです。ですから、他人事のように考えず、自分は社会を作る1人であるという当事者意識を持ち、少し新聞に目を通したり、自分の興味のある問題を詳しく調べてみたりと能動的に動く“クセ”を今からつけていこうと密かに決意したいと思います。

田中様の講演の後のディスカッションでは4人の方々とお話をさせていただきました。その中でも、村上

様と青木様のお話が特に印象に残っています。

村上様は早稲田大学法学部をご卒業なさった後、国際法関係のお仕事、財務省でのお仕事、ODAでのお仕事を経験された後、今は佐々川平和財団で海洋系の調査、研究をしているそうです。お話の中で、高校や大学で勉強する中で、自分の中で「大きなテーマ」と「正解がない質問に取り組む考え方」を見つけてほしいとおっしゃっていました。村上様は経歴だけ見ると、職業の内容が大きく変化しているように感じます。しかし、どの仕事も村上様の大きなテーマである「富の再配分」に基づいたものでした。今の時点でなんとなく就きたいという職業につける人はほんの一握りです。ですが、自分の中に大きなテーマがあればたとえ自分の将来が理想通りに行かなかったとしても、自分に合った道で自分なりに頑張ることができるのではないかと思います。また、社会に出れば、正解がない問題のほうが圧倒的に増えます。その時、どう考えていけばいいかという、起承転結に基づいた「フレームワーク」に情報を入れていき、答えを導き出すそうです。仕事が変わったり、もしくは同じ仕事の中でも、考えるべき問題が180度変わることはきっとあります。ですが、自分の中に固定観念だけでなく、何にでも対応できる考え方があれば、社会で頼られる人になれるのではないかと思います。

また、青木様は、学生の期間は社会へ出るための準備期間であり、社会という海で何が起きているのかを知った上で、その海を自分をしっかり持ちながら航海していく素質を醸成していかなければいけないのだとおっしゃっていました。そのために、高校ですべきことは4つあるそうです。それは、

- ・夢中になるものを見つける
- ・感動を体験する
- ・五感に感じる体験をする
- ・知識(what)よりも、なぜそうなるか(=why)を自問自答する

これらの4つです。

夢中になるものを見つけると、自分のいいところや悪いところがわかり、自分を知ることにつながるそうです。また、五感に感じる体験というのは、現実の自然や人に触れるということであって、テレビなどを用いたバーチャル体験ではありません。バーチャル体験に慣れてしまうと、人生にはスイッチオフもリプレイもないことを忘れ、現実を直視できなくなってしまうそうです。現実で山ほど失敗して、失敗を挽回するために努力して自信をつける、ということが、万が一社会で漂流してしまったときに必要になるそうです。もちろんその失敗も、なぜ失敗したのかを考えなくてはなりませんし、失敗を恐れて初めから挑戦しないなんていうのは以ての外です。また、様々な立場の大人から、それぞれいろんなことを言われ、言われたことに矛盾が起きることもあるかもしれません。しかし、とりあえず今の所は言われたこと全部に取り組んでみて、その結果をみながらまた考えればいいと、教えていただきました。

ここでの経験を通して、お話をしてくださった皆さんは、今まで経験してきたことも年齢も職業も全く違いますが、全員が自分の中にしっかりとした信念と目標を持っているように感じました。私は、まだ大学で勉強したいことも、大人になったらどんな風に社会に貢献したいのかも全く決まっていませんでした。ですが、様々な観点からのお話を聞いたことで、自分の中にあった迷いがなんとなく吹っ切れ、目標が明確になったように感じます。ですから、今まで以上に努力を惜しまず、目標を達成できるよう、精進していきたいです。

最後に、私たちのために貴重な時間を割いてくださった全ての方々に感謝したいと思います。私も大人になった時、同じように学生に言葉をかけてあげられるような人になれていたら嬉しいです。